

線刻を有す土師器について

ー平成 28 年度茅ヶ崎市内で発見された資料を中心にー

加藤 大二郎^(*)

1 はじめに

本論では、平成 28 年度に茅ヶ崎市内で発見された線刻を有す土師器坯の出土資料について、調査状況をまとめた。

2 平成 28 年度の調査について

まず、平成 28 年度に市内で行われた各種調査を概観する。平成 28 年度に行われた調査の種類を大きく分けると、①史跡整備を目的とした遺跡の詳細確認調査、②開発に伴い記録保存を目的とした発掘調査、③開発に対して取り扱いを判断するために実施した試掘・確認調査の 3 種類の調査が行われている。

①については、平成 27 年に国から史跡として指定された「下寺尾官衙遺跡群」を構成する遺跡の一つである下寺尾に所在する西方遺跡の第 3 次確認調査であり、調査面積は 465 m²である。その成果については第 27 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会要旨にまとめられている。

②については、15 件の発掘調査が実施されており、各調査が行われた遺跡の地形は、市中央部の自然堤防地帯 9 件、南部の砂丘地帯 5 件、北部の台地地帯 1 件であった。南部の自然堤防地帯では、浜之郷の本社 B 遺跡、宮ノ腰遺跡、矢畑の勝沼遺跡、金山遺跡、明王ヶ谷遺跡、円蔵の御屋敷 A 遺跡、下ヶ町遺跡で調査が行われており、砂丘地帯では菱沼の前田 A 遺跡、前田 B 遺跡、香川の中通 C 遺跡で調査が行われた。北部の大地地帯では、堤の天神原 A 遺跡において発掘調査が行われた。調査が実施された総面積は約 1393 m²である。これらの調査の概要については第 28 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨にまとめられている他、調査によってはす

でに報告書が刊行されているものがある。

③については、48 件実施されており、その調査総面積は約 276 m²に及ぶ。調査した遺跡は、茅ヶ崎市に所在する 216 遺跡（平成 30 年 3 月 31 日現在）のうちの 40 遺跡と包蔵地外 1 件にあたる。さらに、調査が行われた地点を地域別にみると、南部の低地の調査が 45 件で、低地のうち 17 件が自然堤防上、28 件が砂丘・砂丘間凹地上の調査であり、北部の台地・丘陵部の調査が 3 件である。調査の結果、遺構・遺物がわずかでも確認された地点は 48 件中 30 か所を数える。これらの成果については、茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告 51『市内遺跡試掘・確認調査報告 XVIー平成 28 年度実施の埋蔵文化財試掘・確認調査報告書ー』にまとめられている。

3 線刻を有す土師器とは

今回取り上げる線刻を有す土師器について説明すると、8 世紀後半から 9 世紀頃の土師器坯で内外面に焼成後に「十」あるいは「×」か「井」と認識可能な線刻を受けているものを指す。

当時線を刻んだ人々が、何を意味してつけたか定かでないことから、ここでは「十」あるいは「×」のように 2 本の線が交差しているものを「×」とし、1 本線に 2 本の線が交差するものを「井」とし、1 本の線に 3 本の線が交差するものを「卅」とし、2 本のおおむね平行する線に対し、別の 2 本の平行する線が交差するものを「井」と表現する。さらに井よりも一本多いものを「井 1」とする。

また、完形ではなく、一部の残存部に線刻の一部が確認されている場合は「一」、あるいは

「二」と表現する。

4 対象資料が出土した調査

平成 28 年度の調査のうち、土師器坏に焼成後線刻を受けている資料は②から菱沼前田 A 遺跡第 4 次調査、前田 B 遺跡第 1 次調査、③から浜之郷で実施された 28-46 石原 A 遺跡の調査において出土した。

5 各調査の資料

前田 A 遺跡第 4 次調査では、遺物の総量として、テン箱 12 箱分が出土している。そのうち、10 世紀前半頃と考えられる竪穴住居址から

「#1」が 1 点、少なくとも「二」以上が 1 点出土しており、「#1」を有す土師器は甲斐型の坏底部外面で(第 1 図 1)、「二」は相模型の底部内面である(第 1 図 2)。同調査からは他に、9 世紀第 4 四半期から 10 世紀初頭頃とされている竪穴住居址から出土した相模型の土師器坏の体部内面に「井」あるいは「井」の線刻が見られる。また、同時期の別住居址からは、5 点確認されており、1 点は体部内面に少なくとも「×」以上の線があり(第 1 図 3)、その他は底部内面に「×」が 1 点(第 1 図 4)、少なくとも「井」以上が 2 点(第 1 図 5、6)、少なくとも「×」以上が 1 点である(第 1 図 7)。

また、10 世紀後半以降に埋没したと考えられる溝状遺構からも出土しており、こちらは相模型坏の体部内面に「卅」が刻まれている。また、ピットからは体部内面に「×」の可能性のある相模型坏の線刻資料が出土しており(第 1 図 9、遺構外からは、底部内面が 2 例(第 1 図 14、15)、底部外面が 4 例(第 1 図 10、11、12、13)、体部内面が 2 例(第 1 図 16、17)出土しており、このうち 10、13、14、15、16、17 は「×」の可能性が高く、12 は「井」、その他は破片のため、線刻表現の詳細は不明である。

前田 A 遺跡第 4 次調査の東側約 150m の地点で調査が行われた前田 B 遺跡第 1 次調査では、

テン箱 6 箱分の出土遺物のうち、遺構外から出土した相模型の土師器坏 4 点が底部内面に線刻を有しており、「×」が 1 点(第 1 図 18)、少なくとも「×」以上の線を有すものが 1 点(第 1 図 20)、小片で「一」しか確認できないものが 2 点(第 1 図 19、21)確認されている。

試掘・確認調査 28-46 石原 A 遺跡の調査では、25 点約 370 g の土師器坏片が見つかった中で 1 点少なくとも「×」以上の線を刻まれたもの(第 1 図 22)が確認されており、さらにこの資料は線を刻まれた後に煤が付着しており、線刻後の利用が認められた例である。

以上が平成 28 年度に市内で実施された調査の中で現在までに行われた資料整理の成果として確認されている線刻土器の全てである。

6 考察

平成 28 年度に発見された資料の状況からこれらの資料のあり方を考察する。

まず、線刻を有す部位について確認する(第 1 表)と、底部内面に施されたものが 13 点、底部外面が 4 点、体部内面が 5 点となっており、底部内面に施されるものが多いことがわかる。また、体部内面には「×」以上のものが多く確認されている。最も多いパターンは、底部内面への×である。「×」以上の線を有すものも「×」に含めれば、22 点中 7 点見つかったことから、他と比べて多いパターンと考えられる。

この他の資料を取り巻く遺跡の状況として、出土量に対する確認例を考える必要があるだろう。各発掘調査においては、非常に多くの遺物が出土しているという共通点がある。前田 A 遺跡第 4 次調査は約 206 m²の調査に対して 12 箱分、前田 B 遺跡第 1 次調査では約 119 m²の調査に対して 6 箱分が出土している。同年度に行われた別地点の発掘調査では、約 40 m²で 1 箱、150 m²で 0.5 箱という出土量の地点もあることから、一概に箱数のみで語れるものではないが、体感として、平成 28 年度市内では非常に多い

出土傾向がある遺跡でこれらの線刻土器が発見されている。そして、そのような多量の出土土器の中で、これらの資料は非常に出土量が少ない。大量の欠片の中で、ほんの一握りしかないのである。これは、線刻土器の必要性に関連している可能性がある。

その可能性は未だ空想でしかないが、ある一定の数の土器を管理するためのものであったか、あるいは何か特殊な意味を含めた特殊用途の土器であったと考えられる。

用途としてさらに謎を深ませるのは、試掘・確認調査によって確認された石原 A 遺跡の出土例である。こちらは、煤の付着具合から、線刻後に燈明皿として利用されたことが容易に想像することができる。燈明皿として利用されるものに何のために線刻を行ったのか、非常に興味深い例と考えられる。

参考文献

吉田浩明・河合英夫・加藤大二郎 2017『前田 A 遺跡第 4 次調査発掘調査報告書』

大村浩司 2016「下寺尾官衙遺跡群西方遺跡第 3 次調査の概要」『第 27 回遺跡調査発表会要旨』

加藤大二郎 2018『市内遺跡試掘・確認調査報告 X VI－平成 28 年度実施の埋蔵文化財試掘・確認調査報告書一』

＊茅ヶ崎市教育委員会社会教育課

	一以上	×	×以上	卅	卅以上	二以上	#1	#以上
底部内面	2	4	3	0	2	1	1	0
底部外面	1	0	2	0	0	0	0	1
体部内面	0	0	4	1	0	0	0	0

第 1 表 線刻の位置と種類の集計表



第1図 線刻を有す土師器



第2図 対象資料の出土地点

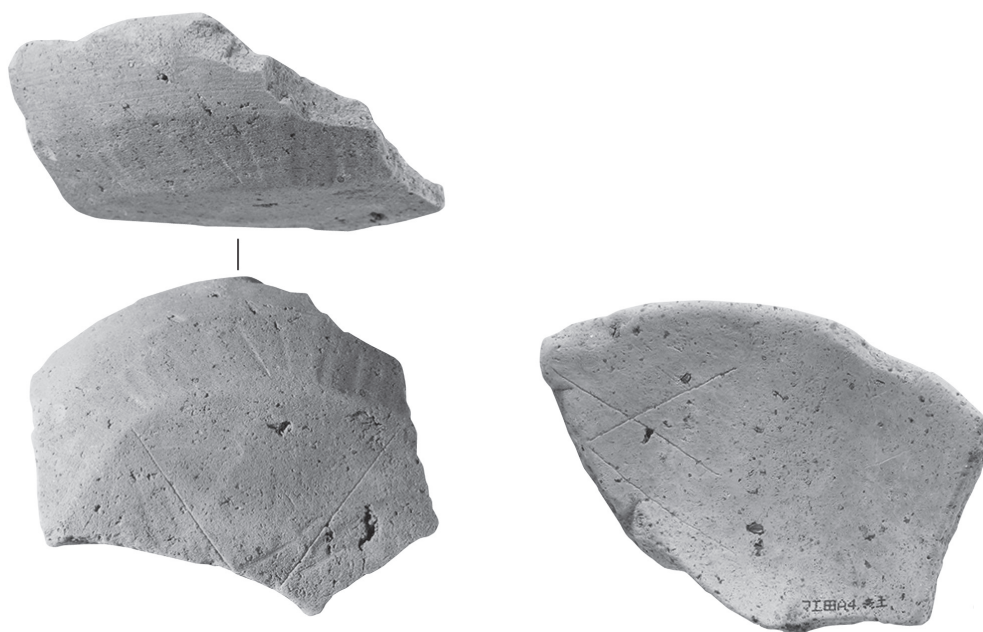


写真1 線刻を有す土師器坏の例

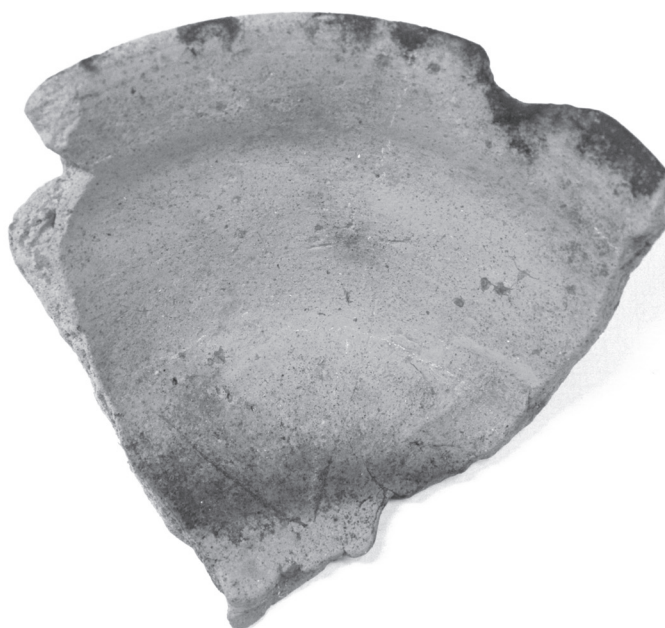


写真2 試掘・確認調査 28-46 石原 A 遺跡出土の煤が付着した線刻土器